

Title	フーコーのマグリット論：可視的なものと言表可能なもの
Sub Title	A Reading of Foucault's essay on Magritte : The Visible and The Expressible
Author	大貫, 恵佳(Onuki, Satoka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.69- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文 図削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フーコーのマグリット論——可視的なものと言表可能なもの——

A Reading of Foucault's essay on Magritte: The Visible and The Expressible

大貫 恵佳

1. はじめに

本稿は、ミシェル・フーコーによるルネ・マグリット論『これはパイプではない』(1973)を通して、フーコーの考古学的手法の意義を探る試みである。『これはパイプではない』は、フーコーの他の重厚な著作に比べれば、小さく読みやすい本である。内容もさることながら、マグリットの一連のデッサンに加えて、謎めいた「パイプの見取り図」なるものも添えられており、ユーモアにあふれた一冊だ。その軽快さゆえに真正面から取り扱われることの少ない書物であるが、この本は、フーコーの他の仕事と奥底でつながっている。具体的にいえば、本書で示されるマグリットの絵画における「画像」と「文字」との関係(隔たり)は、フーコーの考古学を支えた方法論と通底しているのである。

フーコーのマグリット論は、1968年に雑誌論文として公表されているが、その後、大幅な加筆修正がなされ、1973年に単行本として出版されたり。フーコーは、この頃、『言葉と物』(1966)、『知の考古学』(1969)、『言語表現の秩序』(1971)といった「知の考古学」に関する一連の仕事にとりかかっていた。その後、1970年代の半ばには権力の研究へと進んでいくことを考えると、マグリット論は、時期的には、知と権力の研究のはざまに書かれたものだといえる。マグリットについてのこの小さな書物を読むことによって、知や権力といった主題をこれまでとは異なる仕方で理解することができるかもしれない。そして、そのようにして知や権力に関する議論を読むとき、私たちは、ユーモアをもって、知や権力につきまとう重苦しさをくぐり抜けることができるかもしれない。

2. <共通の場>の不在

(1) はじめのデッサン

マグリットは、パイプの造形とともに「これはパイプではない」という文字を描いた絵画を複数制作している。そのシリーズの中で、私たちが画集や美術館でよく目にするのは、いかにも「マグリット風」な油絵のものであろう。だがフーコーが論じているのは、油絵ではなく、その下絵のようにも見える簡素なふたつのデッサンについてである。ひとつめのものは、中央にパイプの絵が描かれており、その下に「これはパイプではない」という文字が描かれているという。

ふたつめのデッサン(次頁参照)は、もう少し複雑なものだ。こちらのデッサンでは、ひと

大貫恵佳「フーコーのマグリット論—可視的なものと言表可能なもの—」

『三田社会学』第20号(2015年7月)69-82頁

つめのデッサンの構図がそのまま、今度はしっかりと額縁に収められ、イーゼルに載せられ、そのイーゼルが木の床に置かれている。額縁に入ったその絵の上方には、額の中のパイプよりもはるかに大きなパイプが浮遊している。

『これはパイプではない』の中には、前者のデッサンは収められていない。後者と思われるものは、冒頭に収録されている。その絵とフーコーの説明から、ひとつめには、ふたつめのデッサンの額縁の中だけが描かれているのだらうと推測できるというわけだ。

いずれにしても、これらの絵は私たちが戸惑わせる。当惑の正体はなんだろうか。まずはフーコーの手順に従って、最初のデッサンがもたらす困惑から見てみよう。単純な構図ではあるが、「異様」なデッサンである。誰がどう見てもパイプに見えるものの下に「これはパイプではない」という文言が記されているのだ。フーコーは、この「異様さ」は「矛盾」ではないという (Foucault 1973=1986:

18)。なぜなら、矛盾とはふたつの言表の間あるいは同一の言表の内部にあるものだが、ここにはひとつの言表しかないからである。それでは、この言表は虚偽なのだろうか。しかし、明らかにパイプにしか見えないものではあるが、それでもそれはデッサンでしかなく、物としてのパイプそれ自体ではないのではないか。とはいえ、言語上の習慣にのっとれば、やはり「それはパイプである」というべきなのかもしれない……。

人を途方にくれさせるのは、文を画に関係づけ立ち戻らせることが不可避的である (指示詞と、パイプという語の意味と、図像の似ていることとがわれわれをそう仕向けるように) ということであり、しかもこの言明が真であるとか、偽であるとか、矛盾しているとか言うことを可能ならしめるような平面を定めることが不可能であるということなのである。(Foucault 1973=1986: 19-20)

文字と図像がはっきりと独立した場所に配置されているこのデッサンにおいて、文字と画像を関係づける絆は、「これ」という指示詞である。指示詞によって図像と文字の間に生じる交錯を、フーコーは独特の図を用いて次のように説明している。

まず、「これ」がパイプの図像を示す場合、この文言は、「《これ》（パイプの図像）は、《パイプ》（パイプという言葉）《ではない》（とは異なる）」という意味になるだろう。

次に、この同じ文言は、「《これ》（「これはパイプではない」というこの言表）は、《パイプ》（上方に図像として見えている物体）《ではない》（と等価ではない、を表象するものではない）」と読むことができる。

そして最後に、このデッサン全体について次のようにいうことができる。「《これ》（パイプの造形と「これはパイプではない」という文言とによって構成されているこのデッサン全体）は、《パイプ》（言語的かつ視覚的であるような混成的な要素）《ではない》（と両立しえない）」と。

つまり、「パイプの画と、それによってこの同じパイプを名ざすことのできる文との直接的かつ相互的な帰属」（Foucault 1973=1986: 37）が否定されているのである。「画像と文とはそれらに固有の重力にしたがってそれぞれの側に落ちるのだ。それらはもはや共通の空間、双方が干渉できるような場、言葉が図像を受け取ることができ、そして画像が語彙の領野に入り込むことができるような場というものを持たない。……空間の不在、書字という記号と画像を象る線とのあいだの『共通の場』の消滅なのだ」（Foucault 1973=1986: 39）。

私たちは一般的に、視覚的表現と言語的表現の間に、それをつなぐパイプそれ自体（物）——あるいは、物と対峙する主体——があると想定している。しかし、第3の解釈によるのであ

れば、マグリットのデッサンはこういつていることにもなる。「どこにも、パイプはありはしないのだ」(Foucault 1973=1986: 40)。

(2) 言表可能なもの／可視的なもの

そもそも、フーコーはなぜマグリットの絵画をとりあげ、その奇妙さを論じるのだろうか。フーコーとマグリットの交流は、彼がマグリットにレーモン・ルーセル論を贈呈したことから始まった。1966年、マグリットは『言葉と物』を読んで考えたことをしたためた手紙とともに、自身の絵の複製をいくつかフーコーに送っている。その中にパイプのデッサンが含まれていたらしい。その翌年、マグリットは死去する。フーコーが、「これはパイプではない」の最初の草稿を書きあげたのは、その3か月後のことだった。画家とのそんな個人的なつながりがフーコーに何がしかの影響を及ぼしたのかもしれない。

だが、おそらくフーコーにとっては、「イメージ」と「テキスト」の間の隔たり(共通の場の不在)が重要だったのだ。このテーマは、フーコーの著作のいたるところに見出されるものだ。たとえば「言葉」と「物」として、ある時には、「言説」と「非言説的实践」として、あるいは、「言表可能なもの」や「可視的なもの」として、それらは論じられている。フーコーの用語は、その意味するところを微妙にずらしながらも、彼の関心はつねに、両者の相互還元不可能性と、それらが結び結ぶ関係性に注がれていたといえる。

ジル・ドゥルーズは、フーコーについて論じるとき、「可視的なものと言表可能なものという、フーコーの非常に特殊な二元論」(Deleuze 1986=1987: 131)を強調する。この二元論はフーコーが歴史研究において確立した方法であり、マグリットについての論考は、その方法の「ユーモア版」だというのだ(Deleuze 1986=1987: 99)。ドゥルーズは、あるインタビューの中で、フーコーと「モーリス・ブランショに通じるころ」として、「まず、『語ることは見ることではない』という問題。つまり、見るできないものを述べることによって、言語をその極限までつきつめ、〈言えぬもの〉の力にまで高めていく、あの差異」(Deleuze 1990=1992: 162/163)を挙げている。ドゥルーズのこの指摘は、フーコーに関するあらゆる注釈のうちで、もっとも根源的なものである。

実際、フーコーの仕事を振り返ってみると、とくに、1960年代から70年代前半までになされた「知」をめぐる研究においては、その二元論がはっきりと表れている。『言葉と物』(1966)は、「人文科学の考古学」というサブタイトルが示す通り、人文科学が近代において誕生するまでの歴史を、独自の視点から明らかにしたものだ。それは単なる思想史や科学史ではない。フーコーいわく、あらゆる学問的な反省や認識は、その可能性の条件(エピステーメー)によって規定されている。彼が着目するのは、その条件の方である。学問的な認識は、文化と時代に応じて異なる「秩序」の空間の上に成り立っている。『言葉と物』の当初予定されていたタイトルは「物の秩序」であったというが、それはまさしく、「文化がいか^{タブロー}に^{して}物どうしの近さを体験するか、いか^{にして}物相互の近縁関係の表と、それにしたがって物を通覧しなければなら

ぬ秩序とを設定しているか、そうしたやり方を観察し、「類似関係の歴史」を分析するものであった (Foucault 1966=1974: 22)。フーコーが他の場所で語った言葉を借りるのであれば、「ひとつの文化をその歴史のある瞬間において特徴づける、見えるものと言いうるものとのあの絡み合いのすべて」(Foucault 1967→2001=1999: 483) を描き出す試みだったといえる。

その歴史は単純に図式化すれば、こういうことだ。16世紀末までのエピステーメーは「類似」の原理に貫かれており、17世紀以降には「表象の分析論」へと変化し、さらに18世紀末には、「有限性の分析論」にとってかわられる。こうした整理はよく知られているものだが、では、それぞれの時代において「見えるもの」と「言いうるもの」はどのように絡み合うのだろうか。

ルネサンスの時代、物は外から見てとることのできる「外徴」によって近縁関係を保っていた。たとえば、胡桃の殻は人間の頭蓋骨膜の傷を癒し、胡桃の核(実)は頭の内部の病に効くとされていたが、この効能が発見されたのは、胡桃の殻が頭蓋骨に、実が脳に似ているからだという。物はその上に解説されるべき記号を持っており、人々はそれを言語を読むように読みといていくのである。言葉もまた、物との類似関係によって記号たりえた。「一方では物それ自体が言語としてみずからの謎を隠すとともに顕示するからであり、他方では、語が解説すべき物としてみずからを人間に呈示する」(Foucault 1966=1974: 60)。ここでは言語と物が共通の空間で絡み合っており、可視的なものと言表可能なものが際限なく交錯している。

しかし、「物を視線と言説の双方に結びつける新たな仕方」(Foucault 1966=1974: 154) が登場する。それが「表象の分析論」として知られる古典主義時代のエピステーメーである。ここでは、類似の曖昧さは退けられ、普遍化された比較の手法によって同一性と差異が測られ、物の一覧表(タブロー)が作成される。たとえば、博物学は、「可視的なものに名をあたえる作業」(Foucault 1966=1974: 155) であるが、それは全てを見るわけではない。見るべきものは、人間の認識の側ですでに制限されている。「博物学とは……名ざすことの可能性を見こした分析によって表象のうちに開かれる空間にほかならない。つまり博物学とは、《言う》ことができるであろうものを《見る》可能性、しかも、物と語とがたがいに区別されながらも表象のなかではじめから通じあっていなければ、見たうえで言うことも、それどころか遠くから見ることもできないであろうものを、《見る》可能性なのだ」(Foucault 1966=1974: 153)。

やがて、この平面的な表象の空間も解体されるときが来る。18世紀末、生物の可視的な特徴の内奥に「生命」が発見される。可視的なものの表面の下に、不可視の奥行きを見出したのは、自然の学だけではない。この時期に、表象の枠には収まらない「言語」固有の歴史性が発見されたし、富の分析においても交換=表象の背後に「労働」の問題が発見された。そしてその深層において、それらの領域を支える「生ける人間」「語る人間」「働く人間」が知の客体として浮かびあがってきた。ある時代において、人は何を見て、何を語るのか。そして見ることと語ることの間にかなる関係が結ばれるのか。エピステーメーの転換は、このように可視的なものと言表可能なものの関係の再編として論じられている。「人間」の誕生というあまりにも有名なあの問題もまた、フーコーの二元論から導き出されているのである。

3. 『言葉と物』から『監獄の誕生』へ

(1) 知と権力

60年代のフーコーは知に関心を注いでいたが、その後、彼は自身の研究の重心を権力の問題へと移していくことになる。だがもちろん、知と権力は、別々のものではなく、相互に関連しあう問題であった。『監獄の誕生』(1975)は、フーコーが権力を主題とした最初の書物であるが、それは「人体を攻囲してそれを知の客体となしつつ服従させる、権力と知の諸関連」(Foucault 1975=1977: 32)を分析するものであった。「服従〔=主体〕化の種別的な様式が、どのようにして、《科学的》地位をもつ言説のための知の客体としての人間を生み出すことができたか」(Foucault 1975=1977: 28)、これがフーコーの提起した問題であった。したがって、『監獄の誕生』は、『言葉と物』で示された知の枠組みの変容が、いかに権力と関係しているのかという視点で読むことができる。要するに、処罰の歴史はエピステーメの変容と呼応するかたちで描かれているのである。フーコーの二元論をたどるためには、その対応関係を概観しておくべきだろう。

だがその前に、「知と権力が関係する」というとき、「関係」とはどのようなものなのかを確認しておこう。フーコーは、のちにセクシュアリティを研究することになるが、その際、知と権力の「内在性」について語っている。セクシュアリティという科学的で公平な知識の領域があって、権力がそれに対して外側から何がしかの要請をする(抑圧する、禁止する等)などと考えるはいけない。「セクシュアリティが認識の領域として成立したのは、それを可能な対象として制定した権力の関係を出発点としてである。また、逆に、権力がそれを標的と見做すことができたのは、まさに、知の技術や言説の手続きがセクシュアリティにそのような価値を与えることができたからに他ならない。知の技術と権力の戦略の間には、いかなる外在性の関係もない、それは両者がそれぞれに特殊な役割を担い、互いの差異を出発点として相互に関係づけられる場合ですらもそうである」(Foucault 1976=1986: 126-7)。権力は知の対象を制定し(つくりだし)、知はそれを対象化する価値のあるものとして位置づける。そのことによって、権力はますますそれを標的としうるのだ。

では、知と権力は人間の身体をいかに取り扱ってきたのか。周知のとおり、『監獄の誕生』は、刑罰の歴史的変遷を、残酷な身体刑から穏やかな刑罰へ、そして監禁へという3段階で示している。まず、「古い君主権」の時代においては、処罰の中心となるのは「華々しい身体刑」であった。身体刑は、犯罪に対する応報(写し)であり、祭式(見せしめ)として、人々の目に触れることによって機能する。残虐に処刑される身体に、人々は君主の力の強大さと、受刑者の犯した罪の烙印を読みとる。たとえば、犯行現場で処刑を行ったり、「極端な場合になると、刑の執行のさいに、犯罪そのものの芝居がかった再現」(Foucault 1975=1977: 49)をしたりと、受刑者の身体は、「ピンでとめるようにして」「犯罪そのものと結びつけ」られた(Foucault 1975=1977: 48)。そればかりか、死刑囚は自分の有罪性やその償いについて、口述したり、書かれたものを掲げたりさせられていた。処刑の場で、人々は、王の力と犯罪それ自体を読み、かつ

見たのである。権力の技術論は、受刑者の身体の上に、言表可能なものと可視的なものを交錯させる。それはルネサンスのエピステーメーにおいて、物が客体化される仕方と対応している。

17世紀後半に入ると、啓蒙思想的な刑罰の改革運動が始まる。表向きには、それは、身体刑の残忍さを告発し、刑罰の緩和を目指す動きであった。だがフーコーは、そこに権力の「経済策」を見る。刑罰は、もはや、君主による報復ではなくなる。それは「社会全体のため」に、将来に同じような罪を犯す者が現れないように、なされるのである。だから、量刑は「犯罪との、ではなく、その起こりうる繰返しとの関係で」(Foucault 1975=1977: 95) 判断されなければならない。したがって、大仰な見せしめのお祭り騒ぎは無駄となる。見せしめが行われるのは、人々が受刑者の身体の上に、犯罪のもたらす自己への不利益を「読みとる」機会としてだけでよい。「懲罰は、一種の祭式であるよりむしろ一種の学校」であり、「ひとつの儀式であるよりむしろひとつのいつも開かれている書物」となる(Foucault 1975=1977: 116)。18世紀以降、身体は、「苦痛の主体であるよりも表象の客体」であり、問題は「苦痛の感覚ではなく……《苦しみ》の観念がもたらす《苦しみ》」となる(Foucault 1975=1977: 97)。フーコーはこれを「処罰の記号=技術論」と呼ぶ(Foucault 1975=1977: 96)。それは、博物学が種を分類するかのごとく、「個別的なそれぞれの犯罪、処罰されるべきそれぞれの個人が、いかなる恣意にもよらずに一般法則にしたがって区分されるように……犯罪と刑罰にかんするリンネ的な体系」(Foucault 1975=1977: 101-2)を組み立てようとする。人々は、「秩序博物館での実務教育」(Foucault 1975=1977: 116)を受けるように、処刑を参観するのである。可視的な刑罰であるが、そこに見られるのは原因となった犯罪でも裏切られた王でもない。また苦しみの主体ではない。それは、処罰の経済学に基づいて、すでに再記号化された象徴としての身体である。権力の記号=技術論は、古典主義時代の知の枠組みにのっとして、受刑者の身体を表象の空間に閉じ込める。そうすることによって、身体を活用するのである。

(2) 分類から規律訓練へ

しかし、身体刑の時代は長くは続かなかった。18世紀末には、監禁が処罰の大部分を占めるようになる。一見するとそれは、改革者たちが目指した人道化の成果に思われる。だがここにもフーコーは新しい権力の技術論を見る。たしかに、受刑者を閉じ込めてしまうのであれば、彼らは象徴として機能しえない。監禁は、刑罰の記号=技術論を採用してはいないのだ。監禁においては、規律訓練が主要なテクノロジーとなる。もはや、「刑罰の適用地点は表象ではない、それは身体であり、時間であり、毎日の動作と行動であり、さらに精神、ただし習慣の座である範囲での精神である」(Foucault 1975=1977: 131)。この権力のテクノロジーは、「身体の訓育によって行為のなかに習慣というかたちで残される痕跡とともに、そうした訓育の方法を——表徴ではなく——用いるのである」(Foucault 1975=1977: 133)。

規律訓練の技術は監獄において洗練され、監獄のおかげで権威づけられはしたが、もともとは司法が発明したものではない。司法が採用する以前から、兵舎や病院、工場、教育の場で徐々

に磨きあげられていった。だがどこで使用されるにせよ、規律訓練は、個人を個別化する技術である。それは、独房に見られるように、諸個人を空間に配分する。しかし、その配分は、古典主義時代の分類学が行ったように、「個々人を種や属などにはめ込む」(Foucault 2003=2006: 89) のとは異なる。生物学が表象の空間の奥行きに生命を見出したように、規律訓練は可視的な犯罪行為の背後に、不可視の潜在的危険を探し出す。それだけにとどまらず、個人を時間的にも取り締まり、段階的に育成し、その状況を記録し、個人に対する知を集積し、その力が全体として最大化するように諸個人を組み合わせる。「身体、個人、時間、労働力の配分の技術」が、古典主義時代の分類学を「時代遅れ」な知へと追いやり、「それとともに、人間、身体の問題、時間の問題などが現れることにもなった」(Foucault 2003=2006: 90)。フーコーはこの背景に資本主義社会の発展を見ている。

植物、動物、物体、価値、言語などの、経験に与えられる多数多様性の問題に対して、17 世紀と 18 世紀の古典的科学は、分類という操作によって、すなわち、古典主義時代全体を通して経験的認識の一般的形式であった分類学的活動によって応じました。これに対し、資本主義が発展して以来、……単なる分類学的な活動は、明らかに、その有効性を失ってしまいました。そうした経済的必要性に応えるために、分類の技術とは全く異なる技術によって、人間を配分しなければなりません。……そして使用すべきその何かとは、私が戦術と呼ぶものです。規律はひとつの戦術であるということ。すなわち、規律は、分類とは異なる図式に従っていくつもの単一性を配分するある種のやり方であるということ、それらを空間的に配分し、生産活動のレベルにおいて最大の効率を実際に持ちうるような時間の集積を可能にするための、ある種のやり方であるということです。(Foucault 2003=2006: 89-90)

資本主義社会においては、資本の集積とともに、「人間の集積と呼びうるようなもの」(Foucault 2003=2006: 88) が必要とされる。規律訓練はそれを担うのである。すべての人々を「有能な」労働者に仕立てあげるのではない。「人々をその多数多様性そのものにおいて使用可能」(Foucault 2003=2006: 89) にし、力の組み合わせによって、全体としての成果があがるように配分するということである。規律訓練においては、個人としての人間に関する知が集積されつつ、同時に、権力の成果としての従順な身体が生み出される。「権力は生み出している、現実的なものを生み出している」(Foucault 1975=1977: 196) とフーコーはいう。権力は、規律的な個人を現実に生み出すのだ。

ところで、規律訓練の技術は「視線の作用によって強制を加える」(Foucault 1975=1977: 175) ものである。パノプティコンがそうであるように、この権力が「支えとするのは、ただ視線と光のみ」(Foucault 2003=2006: 95) である。それは、言説によって作動する法とは対照的だ。法は「普遍的規範にもとづいて法的主体を規定」(Foucault 1975=1977: 222) し、違法の者と適

法の者を二元論的に分割するが、規律訓練は際限なく個別化する。司法と規律訓練は、互いに異なるだけでなく、相互に還元不可能なものである。しかし、監獄制度において、このふたつの領域、つまり、「司法という法律的な領域と規律訓練という法律外的な領域」(Foucault 1975=1977: 301)の間の隔たりは覆い隠されてしまう。

フーコーはこれを「法と規律による個人主義の挟み撃ちのようなもの」(Foucault 2003=2006: 73)だという。一方に、契約の主体としての抽象的で法的な個人があり、他方に規律訓練によって生み出された規律的な個人がある。そして、これを連結するのが人間諸科学やヒューマニズムの言説である。それらは、あるときは、「政治的テクノロジーによって規律的個人として切り分けられ構成されたものこそが、法的個人の具体的で現実的で自然な内容であると信じさせ」、またあるときは、「規律的個人は、疎外され、隷属させられた個人であり、それは本来の個人ではない。規律的個人をかき削ってみなさい。……そうすれば、その生き生きとして活力にあふれた原初的な形態として、哲学的かつ法的な個人がみいだされるであろう」(Foucault 2003=2006: 74)と主張する。この「法的個人と規律的個人とのあいだの揺らぎが残した残像のようなもの」が19世紀および20世紀の「〈人間〉と呼ばれるあの錯覚、あの現実」(Foucault 2003=2006: 74)の正体だということである。

4. ふたたび、マグリットへ

(1) ふたつめのデッサン

マグリットのデッサンに戻ろう。マグリットのはじめのデッサンは、図像と言葉が共通の場を持ちえないことを示していた。フーコーの知と権力の問題を経由して、私たちは、言表可能なものと可視的なものとの間の隔たりが、フーコーにおいてどのような意味を持つのか理解することができる。言表可能なものと可視的なもの、そしてそれらに結ばれる関係は、その文化の知と権力によって決められている。ドゥルーズがいうように、「物と言葉にとどまっている限り、私たちは見ているものについて語り、語っているものを見ていると、またふたつは結合していると、信じることができる。……しかし、言葉と物を切開するなら、言表と可視性を発見するなら……どちらもそれ自身を他から分かつ自身の限界に、見られることしかできない可視的なもの、語られることしかできない言表可能なものに到達するのだ」(Deleuze 1986=1987: 104)。

しかし、私たちは徹頭徹尾、知と権力の内部に住まう。知と権力の前には何も無いのだ。だからこそ、フーコーは、物にもよらず、コギトにもよらない、独特の二元論を方法論として慎重に選択したのだ。

そこで、マグリットのふたつめのデッサンである。それぞれの側に落ちてしまったパイプの絵と「これはパイプではない」という言表は、再度拾われ、今度は、丁寧に額の枠組みの中に収められ、イーゼルに載せられる。

そこからして、マグリットが提示した「これはパイプではない」のシリーズ最後の作品が理解される。パイプの画とその説明文の役をつとめる言表とを絵=黒板の明確に枠を定められた表面に据え（それが絵であるかぎりにおいて文字は文字の画像であり、黒板であるかぎりにおいて図像は言説の教育的延長にすぎない）、その絵=黒板を太くて頑丈な三脚の上に据えることによって、マグリットは画像と言語とに共通の場を再構成する（芸術作品の永続性を通じてであれ、物の名を教える授業の真実性を通じてであれ）のに必要なことすべてをしているのである。(Foucault 1973=1986: 41)

フーコーは、額縁を黒板だという。これがフーコーの仕掛けだ。彼は、「正しい」見方と読み方を教える知と権力の場である学校的空間にこの絵を戻す。私たちの誰もが、知と権力から逃れられないということを示すかのように。さらにフーコーは、『これはパイプではない』を単行本化する際、上記の引用部分のあとに大幅な加筆を行っている。加筆されたのは学校の授業の場面だ。熱心な小学校教師が、黒板にパイプの絵を示し、いつもの授業のように、「これはパイプです」と示そうとする。しかし、先生は「たちまちしどろもどろになってこんな風に言い直さねばならなくなる」(Foucault 1973=1986: 42)。

「これはパイプではなく、パイプの画です」、「これはパイプではなく、それはパイプではないと述べる文です」、「《これはパイプではない》という文はパイプではない」、「《これはパイプではない》という文の中のこれというのはパイプではない、この黒板、この書かれた文、このパイプの画、こうしたものはみなパイプではないのです」。(Foucault 1973=1986: 42-3)

否定はますます増えてゆき、声はもつれ、つまる。混乱した先生は……身をよじって笑い転げる生徒たちを眺めやるのだが、生徒たちがこんなにも大笑いしているのは、黒板の上、ぶつぶつと打ち消しの言葉を呟く先生の頭上に、湯気が立ち昇って徐々に形をなし、今や何ら疑問の余地のないほど実に正確にひとつのパイプを描き出しているからだということに気づいていない。(Foucault 1973=1986: 43)

上方のパイプを見て、生徒たちは「それはパイプです、それはパイプです」とわめきたてるが、先生は間違っていない。その上方に浮遊するパイプとて、所詮絵に過ぎないのだから。「してみれば、足が斜めに切られていて見るからに不安定な画架は、もはや平衡を失って倒れるほかはなく、額縁はばらばらになり、タブローは床に転がり、文字は散り散りになるほかないのだし、『パイプ』も『こわれる』かもしれない」(Foucault 1973=1986: 44)。

共通の場 (le lieu commun [紋切り型]) というもの——陳腐な作品ないし、毎日の変わ

りばえのしない授業——は消滅したのだ。(Foucault 1973=1986: 45)

フーコーにとっては、「共通の場」は、知と権力の内部から、教室という規律訓練のための空間においてこそ、壊されなければならなかったのである。

(2) 〈同一者〉の絵画

マグリットの絵画に対して、フーコーは、『『かのように』から解放された〈同一者 (Même)〉の絵画』(Foucault 1973=1986: 72) という言葉を寄せている。最後にこの「同一者」とは何かということを考えておかなければならないだろう。

フーコーは、「15世紀以来20世紀にいたるまで、西欧絵画を支配してきた」原理のひとつは、「似ているという事実と、そこに表象＝再現のつながりがあるということの肯定＝断言とのあいだの等価性を定立する」ことだという(Foucault 1973=1986: 47/51)。「ある図像がある物(ないしは何かしら別の図像)に似ているということ、ただもうそれだけで絵画のうちに、『あなたが見ているのは何なにである』という自明で月並みな……言表」が「忍び込む」(Foucault 1973=1986: 51)。マグリットの絵は、他のどんな絵画よりも正確に「似ている」ということに執着している。パイプの絵はパイプそのものにそっくりだし、他のパイプの絵にもそっくりである。だがマグリットにおいては、似ている要素が多様化し、互いに他に似ているため、何が何に似ているのかを定めることができない。マグリットは、「似ているものの際限のない連なりを能うかぎり遠くまで追いながら、それが何に似ているのかを言おうとする一切の肯定＝断言を取り除いて身軽にしてやるのである」(Foucault 1973=1986: 72)。

ここでフーコーは、類似と相似という互いに区別される概念を持ち出す²⁾。「類似には一個の『母型』というものがある。すなわちオリジナルとなる要素であって、それから取り得る、だんだんに薄められてゆくコピーのすべてを、自己から発して順序づけ、序列化するものだ。…相似したものは、始まりも終わりもなくどちら向きにも踏破し得るような系列、いかなる序列にも従わず、僅かな差異から僅かな差異へと拡がってゆく系列をなして展開される」(Foucault 1973=1986: 73-74)。マグリットの描く造形は、互いに似ているが、オリジナルがなんであるかを宙づりにする。それは互いに「同じもの (même)」であるが、「かのように」で送り返される参照先を持たない。それはオリジナルとの完璧な類似を起点とする「同一性 (identité)」の論理を拒絶するのだ。

だが、これだけでは不十分である。パイプの絵が、どこかにあるかもしれぬ「オリジナル」との関係を持ってしまう危険はまだ残されている。そこでフーコーは、周到にその危険を追い払う。「これはパイプではない」という言表を、それぞれの要素に語らせるのだ(Foucault 1973=1986: 82-5)。まず、下方のパイプが語る(「私はパイプではなく、上方のパイプと相似する絵に過ぎない」)。上方のパイプが同じ言表によって答える(「私はパイプに相似したものに過ぎない」)。そしてこの言表自身が語る(「私はパイプではなく、文字表記に過ぎない」)。さらに、そ

これらの声はふたつずつ共謀して、他の要素を告発する。文と下方のパイプが共謀し、「これはパイプではない」と上方のパイプを否定する。さらに、上方と下方のパイプは、書かれた文字に対して「これはパイプではない」と語る。文と上方のパイプは、一方は真実をいう言説であるかのように、そして他方は、物自体の出現であるかのようにふるまって、タブローの中のパイプに対し「これはパイプではない」という。最後に、場所を持たぬある声が、絵画の声として、「こうしたものはすべてパイプではない」と語る。「ただひとつの言表 (énoncé) の中に7つの言説 (discourse)。だが、相似が類似の言明のとりこになっている砦を攻め落とすためには、それ以下であってはならなかったのである」(Foucault 1973=1986: 85)。「『これはパイプではない』のあらゆる要素が発する言説は、うわべは否定的に見えながら……結局のところ肯定的なものであるのかもしれない。すなわち模造の肯定 (=断言)、相似したものの網目の中での各要素の肯定なのかもしれないのである」(Foucault 1973=1986: 81)。

模造の肯定、それを互いに似ている(相似している)という事実だけによらず、「言表」概念によって活性化させること。フーコーは、マグリットの絵画を解説するふりをしながら、そんな操作を加えている。「言表」概念は、フーコーの考古学の要である。「言表」概念において重要なのは、言表の統一性は作者の位置に還元しえないということ (Foucault 1969=1981: 140)、そして、言表は固有の意味で「反復可能な物質性」(Foucault 1969=1981: 155)を持つということであった。「これはパイプではない」というただひとつの言表の中には、いくつもの他の声が反復されうる。言表概念は、「同じもの」のなかに「他なるもの」を重ね合わせることを許すのである。つまり、言表概念は、それ自体が「かのように」から解放された〈同一者〉を内在している。言表可能なものと可視的なものというフーコーの二元論は、〈同一者〉をそのままに肯定する——同一性へと回収しない——思考へとつながるものなのだ。

5. おわりに

フーコーは、単行本版の『これはパイプではない』の末尾に、雑誌論文時にはなかった次の文章を加えている。

いつの日か、画像そのものとそれにつけられた名とが、或る系列に沿って際限もなく転移される相似によって、身許確認を奪いとられるときがやって来る。Campbell, Campbell, Campbell, Campbell. (Foucault 1973=1986: 96)

Campbell, Campbell, Campbell, Campbell——これは、アンディ・ウォーホルの描いたどれも同じような缶詰をさしている。フーコーはドゥルーズについて論じた文章の中で、「ウォーホルの途方もなさ」(Foucault 1970→2001=1999: 420)に触れている³⁾。「車体の裂けた自動車のへこみの中で死のうと電柱の上の電話線に引っかかって死のうと、電気椅子の閃光を放つ青みがかった肘かけのあいだで死のうと、死としての等価性にはかわりがないこと。『どれも同じことだ』

……」(Foucault 1970→2001=1999: 421)。しかしこの単調さの中から「不意に天啓のごとく閃くものは、多様性そのもの——中心にも、頂点にも、背後にも何ものもない——である」(Foucault 1970→2001=1999: 421)。ウォーホルは、どれも同じようなものを少しずつずらしながら反復する(どれも同じようだが、微妙にずれている缶詰)という美術的的技巧によって、その「途方もなさ」を実現したのだが、ここでフーコーがいう「多様性そのもの」とはそうしたズレそれ自体のことではないだろう。

「多様性そのもの」は、同一性を起点にした一覧表のなかでの差異によって説明されるようなものではない。フーコーにとって、それはまだ同一性の支配下にある(それでは、規律訓練が行う多種多様な個別化と同じになってしまう)。フーコーはより根源的な意味で「同一性」からの離脱を求めている。模造や言表が、〈同じもの〉でありながら、〈他なるもの〉を重ね合わせうること。それは、「死」がどれも同じだが、それぞれに特異であるのと同様だ。マグリット論を通して、フーコーは、そうした「多様性そのもの」を捉えようとしていたのかもしれない。

【注】

- 1) 本稿は、基本的に Fata Morgana 社の書籍版 (Foucault 1973=1986) に依拠している。
- 2) マグリットは、フーコーへの手紙の中で「類似」と「相似」の違いの重要性について触れ、『物』はお互いのあいだに類似を持たず、相似を持つか持たぬかのどちらかなのです。類似しているということは思考だけの持前です。思考はそれが見、聞き、あるいは識るところのものであることによって類似するのであり、世界がそれに差し出すところのものにそれはなるのです」(Foucault 1973=1986: 102) と述べる。ここでは絵画における類似の優先性が示唆されており、マグリットの用語法はフーコーとは異なっている。
- 3) ここでのキャンベルの缶詰についての記述とドゥルーズ論 (Foucault 1970→2001) との関連については、翻訳者の豊崎光一による指摘 (Foucault 1973=1986: 125) を参考にした。また、下澤和義 (2007) も、フーコーにおける類似と相似の問題と、ドゥルーズからの影響を詳細に論じている。

【参考文献】 ※翻訳文献からの引用に際しては、適宜、表現を変更した。

Deleuze, G., 1986, *Foucault*, Minuit. (=1987, 宇野邦一訳『フーコー』河出書房新社.)

———, 1990, *Pourparlers*, Minuit. (=1992, 宮林寛訳『記号と事件——1972-1990年の対話』河出書房新社.)

Foucault, M., 1966, *Les mots et les choses*, Gallimard. (=1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社.)

———, 1967→2001, “Les mots et les images,” *Dits et écrits I: 1954-1975*, Gallimard, 648-51. (=1999, 阿部崇・近藤學訳「言葉と図像」『ミシェル・フーコー思考集成II——文学／言語／エピステモロジー』

筑摩書房, 482-6.)

- , 1968→2001, “Ceci n’est pas une pipe,” *Dits et écrits I: 1954-1975*, Gallimard, 663-78. (=1999, 岩佐鉄男訳「これはパイプではない」『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ——歴史学／系譜学／考古学』筑摩書房, 17-37.)
- , 1969, *L’archéologie du savoir*, Gallimard. (=1981, 中村雄二郎訳『知の考古学』河出書房新社.)
- , 1970→2001, “Theatrum philosophicum,” *Dits et écrits I: 1954-1975*, Gallimard, 943-67. (=1999, 蓮實重彦訳「劇場としての哲学」『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ——歴史学／系譜学／考古学』筑摩書房, 396-428.)
- , 1971, *L’ordre du discours*, Gallimard. (=1981, 中村雄二郎訳『言語表現の秩序』河出書房新社.)
- , 1973, *Ceci n’est pas une pipe*, Fata Morgana. (=1986, 豊崎光一・清水正訳『これはパイプではない』哲学書房.)
- , 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard. (=1977, 田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.)
- , 1976, *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*, Gallimard. (=1986, 渡辺守章訳『性の歴史 I——知への意志』新潮社.)
- , 2003, *Le pouvoir psychiatrique: Cours au Collège de France 1973-1974*, Seuil/Gallimard. (=2006, 慎改康之訳『精神医学の権力——コレージュ・ド・フランス講義 1973-1974 年度 (ミシェル・フーコー講義集成Ⅳ)』筑摩書房.)
- 下澤和義, 2007, 「類似と相似——フーコーとマグリット」『専修人文論集 (専修大学文学部紀要)』80: 175-98.

(おおぬき さと か 駒沢女子大学 人文学部 講師)